

○青少年読書感想文中央コンクール茨城県高等学校の部 優良賞

1年 川上 拓海 君（常北中出身） 「『異世界居酒屋のぶ』を読んでみて」

この本を一言で表すとしたら、「飯テロ」が最も適しているでしょう。なぜなら、読んでいる最中から読み終えて感想を書いている今この瞬間まで、ずっと空腹感を抱えているからです。

この本とは、帯に自分の好きな作家さんが「映画化、熱望!!!」とコメントされていたのを見つけたことで、出会いました。今まで、グルメものの漫画は読んでいましたが、小説は初めてだったので、胸の中は期待で溢れていました。大まかな内容は、こことは違う異世界にある中世ヨーロッパ風の都市と、日本の小さな居酒屋のぶの入り口が繋がっていて、飲みに来る人々をもてなす、というものですが、驚きました。イラストも何も無いのに、料理のにおいや食感、味、食べている時の心境までもが、頭の中で再生しだすのです。それに、中の登場人物達は皆、日本の料理を初めて食べるので、表現がとても新鮮で、先入観も無いので、自分が感じていても言葉にできなかつたおいしさに気づくことができます。

「柔らかく、それでいて軟弱ではない味わいだ。」

「口の中を少々火傷しても、構うものか。」

この二つの表現を見つけた時、思わず叫びたくなりました。これからは、ベルトホルトという人が、若鶏の唐揚げを食べて時の感想と心境です。普段からよく食べているせいで、「おいしい」の言葉で済ませていたものを、一からやり直させてもらえた気がします。同時に、共感をこえて懐かしくすら感じました。小学生のころは、おいしい唐揚げを食べるために、揚げたての唐揚げを食べるために、台所に行って、猫舌なのに必死になって、口の中に唐揚げを放り込んでものです。火傷はしますし、親にも怒られるのですが、台所から唐揚げのにおいがただよってくると、毎回、口の中を火傷するために台所にしのび込んだものです。

小学生のころは、何事にも必死でした。やること一つ一つが、自分の中ではとても大事なことで、それぞれに強く色々な感情が込められていたはずですが、でも、最近はそのころのようにくだらないことに必死にチャレンジしようとするのが少なくなりました。のぶに訪れる人々は、おいしい肴とお酒のために必死に口を動かしたり、何を食べ、何を飲むか必死に考えています。その過程や結果から、色々な感情や新しい価値観を芽吹かせています。急に怖くなりました。このまま自分が必死になることが無くなってしまったら、自

分が人間を止め、ロボットのようにになってしまう気がしたからです。人生とは、誰のものでも無く、自分のもので自分のためにあるはずです。何一つ必死になれず、ロボットのように動いているだけでは、自分のためにはなりませんし、生きている意味を失ってしまう気がしました。

どうして、グルメものの和気藹々とした本から、生きる意味という壮大で重い話題がでてきたのか、考えてみました。それは、なんとなく、「食べる」と「生きる」はイコールで結ばれているからだという気がしました。この理屈で考えていくと、「食べ方」は「生き方」ということになりますね。想像してみてください。居酒屋のぶのように、新しい発見をしながら色々な人と楽しく飲み食いすると、何も感じずにただ食事をするのとでは、どちらの方が人間らしく生きていると思いますか。私は前者だと思います。前者の方が自分のためになることが断然多いはずです。ですから、新しい発見ができるように楽しく飲み食いする努力をしていきます。それこそ必死になってやっていきます。まず、のぶの登場人物達を見習って、自分が食べたことの無いものを、手当たりしだい試していきたいと思います。「食べ方」を変えれば、「生き方」も変わるはずです。初めてのことにどんどん挑んでいきます。間違いなく挫折し、諦めたくなることも多いでしょう。そうなる前にまたこの本を読んで、人の暖かさや食事の楽しさを確認して、食欲を満たし、心を満たし、力をみなぎらせ、生きる力に変えて、必死に生きていこうと思います。小学生の時に、唐揚げからもらったパワーのように、「食べる」が私の「生きる」を作ってくれると信じて。

私の家では、母に小さいころから「食べ物で遊ぶのはいいけど、遊んだならちゃんと食べなさい」と口を酸っぱくして言われています。私は、この文章を書く中で「食べる」と「生きる」はイコールで結ばれていると考えました。ここで、母の言葉を借りると、「自分の人生で遊ぶのはいいけど、責任を持って生きなさい」となります。きっと、母も私と同じようなことを考えたのでしょう。この言葉、一生大事にして、必死に生きていきます。